狂風記 下 石川淳

狂風記

下

石川淳

集英社

狂風記（下）

一九八〇年一〇月一〇日　第一刷發行
一九八〇年一一月二五日　第三刷發行

著　者　石川淳
裝幀者　栃折久美子
發行者　堀内末男
發行所　株式會社集英社
東京都千代田區一ッ橋二ノ五ノ一〇
郵便番號　一〇一
電話　東京〇三―二三〇―六三六一（文藝出版部）
東京〇三―二三八―二七八一（販賣部）
印刷所　大日本印刷株式會社
定　價　貳阡圓

© Jun Ishikawa, 1980, Printed in Japan
0093-772276-3041
著者との諒解により檢印は廢止いたします。
亂丁・落丁の本はお取替いたします。

狂風記

下

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

三十

山の手といつても、ちかごろ商店街としてひらけたにぎやかな町筋にちかく、わづかに緑の色をとどめた高臺に、なんとかレジデンスと横文字の名をつけて、當世流行の様式いかめしく、がつちりきづきあげた十八階の建物がでつかいつらがまへを天日にさらして、うかうかあたりに近づくものをおどしにかかつてゐた。おどされるまでもなく、つい土建屋の手に乘つて聞きしにまさる法外な室代をたやすくふんだくられるやうなやつはざらには來ないだらうが、そのざらでないやつが數にしてこの建物をみたすほどにはゐると見えて、ここに空室なしといふ評判であつた。しかし、内部はどうなつてゐるのか、どの扉も一様に堅く殼をとざして、どこになにものが住むとも知れない。その中にただ一ところ、これは外からの出入もあるせゐか、おぼろげながら消息が洩れて、なかば

臆測まじりに、じつはかうと、尾ひれをつけたうはさもながれた。そこはてつぺんの第十八階のことである。

この十八階のワン・フロアを占めて、事務所、集會所、講堂、劍術の道場なんぞと仕切つたほかに、居室の設備もととのつて、これが講堂の扁額にしるされたところの顯幽館である。館のあるじは獨身ときこえて、いくたりかの書生とともにここに起居して、ときどきあつまつて來るわかものどもに書を講じ、またみづから竹刀も取る。劍術はかなり使ふらしい。書のはうはなにを讀むかといへば、當人の編述に係るパンフレットにもとづいて顯幽道と稱するものを說く。その道とやらも當人の發明ださうである。發明の由來はともかく、低い聲で語る說法は存外こまかいセンスもはたらいてまんざら聞けないこともないといふ。この顯幽道人がすなはち森山石城であつた。石城についてたれでもとかく氣にしたがるのはその說法よりもその生活ぶり……露骨にいつて、カネの出どころに首をひねるのは、俗情のかんぐりにはしても、無理はなかつた。げんにデラックスとうたつたこの建物のワン・フロアにたかだかとをさまつて、手の下に書生をやしなひ、ガレーヂには外車といふ羽振なのに、石城はどこに收入のたよりをえてゐるのか判然としない。わかものをあつめても、月謝のやうなものを取るわけではなく、パンフレットも無料、それのみか、ときに茶話會なんぞを催しておまけにビールぐらゐ出すこともある。この說法とても、當人があちこち驅けまはつてまで、講演の出版のとさわがしい宣傳はしない。わづかに來つて津を問ふものがあればこれを拒ま

ないといふ態度である。この門では、ことばをもつてする講話とならんで、竹刀をもつてする稽古がおこなはれて、ことばはねんごろに、竹刀はきびしく、ひつぱたいたり、いたはつたり、緩急よろしきをえて、道の妙趣をじわじわと子弟の身心にしみこませようといふ方針らしい。石城は名利をもとめることなく、鐵筋コンクリートの巖窟にこもつて、スモッグまじりの霞を食つてうそぶいてゐる非常の人物のやうに見える。その霞の中にいかなる仕掛があるのか、警備のゆきとどいた十八階までのぼつて、ふところをのぞいたものはゐない。ただこのレジデンスを經營するのがかの鶴卷大吉の傘下に屬する某土地會社といふことは知れてゐる。またてつぺんの道場にあつまる子弟の多くがやつぱり大吉老人の息のかかつたさまざまの商社とか團體とかの若い社員といふことも、おのづから洩れないことではない。したがつて、道場の先生とやらもおなじ蔓につながるくちではないかと、一應疑をかうむるのは避けがたいところだらう。しかし、てつきりそれと證據をつかまれたわけではない。解けない疑惑。石城の生活はますます神祕の雲につつまれた。神祕はさらに深くその思想にある。思想の脈をひくとなると、金脈をさぐるほどおもしろくもなし、しかもきなくさいにほひのする界隈だけに、みなけむつたがつて、疑惑のうちにほつたらかしのまま、ちかづいてこの神祕を解かうとするやうなものずきはめつたにゐない。さういつても、パンフレットに出てゐるかぎりでは、もし欲すれば、石城の思想の要領は活字の上におよそのあたりをつけることができないではなかつた。記述は講義調、説得調、雑談調といろいろまじつてゐるが、ときに或問のかた

ちを取つて聞きとりやすく自注をほどこしたところもある。

問。まづうかがひますが、顯幽道となづけたことばの由來はどういふことですか。

答。道と申したのはわたしの世界觀といふほどの意味です。これをあたまごなしに道だといつて、みなさんに押しつけるわけではない。わたしは世界をかう見るが、みなさんはどう見るか。もしわたしの說くところに依つて、みなさんのうちにひそんでゐる（もしくはねむつてゐる）本然のたましひが目をさまして、なるほどこれだと合點して、この道に合致して來ればなによりです。ただし、完全な合致に至るまでのあひだには、みなさんにおいて、あれこれと考が出て、批判もまたありうるでせう。批判結構。遠慮なくどしどしいつて下さい。迷が多ければ、それだけ道に入ることが深くなるでせうから。

問。それで顯幽といふのは。

答。これは古學のことばを取つたのです。顯とは顯明事（アラハニゴト）、幽とは幽冥事（カミゴト）です。ほかのことばをもつてしては、どうもぴつたりした表現にならない。この古語を今日にあたらしく生かして、わたしのことばとして使ひます。

問。字づらを見ると、どうも目に見える世界と、目に見えない世界と、二つならべて出したやうなおもむきですね。この二つの關係がどうかなるのですか。

答。あなたはおそらくこれを外國語にホンヤクして早わかりの見當をつけようとしてゐるのではありませんか。その質問はどうやら外國產の教養派のにほひがする。せつかちのわるい癖です。道をひろめるためにはホンヤクもいけないとはいはないけれど、はじめから外國流の考をもちこんで一口にのみこまうとするのはやめて下さい。わたしは教養にうつたへて理解をもとめるのではない。これはあなたのたましひの問題ですぞ。

問。一發しかられましたな。じつをいへば、こちらは教養からつけつ、古語はさつぱりのくちです。つつしんで虛心坦懷にオハナシをうかがひます。

答。その態度はよろしい。

問。では初歩からどうぞ。

答。初歩が肝腎です。顯幽と申すと、黑白にわかれてゐるやうな錯覺があるかも知れませんが、さうではない。世界は一つ。たとへば、黑白の糸がなひあはされて一本の綱となる。まづこれを御承知ねがひます。念のためにしばらく古學の筋を說くならば、かの大國主が顯國（ウツシクニ）をアマテラスの子孫に讓つておん身はヨミの國にかくれたとき、二國の間に境界線を引いて以後交涉を絕つたかのごとくには見えるものの、ここがちとはつきりしない。この段說いて盡さざるものありといふのがわたしの見解です。大國主がかくれたのは死んだといふことではなく、顯國から去つて冥府に生きてゐる。この神はヨミの國を領して、その國の事を統べる。すなはち

幽冥事です。ただし、この神のみこころは領分のうちだけにおこなはれるとはかぎらず、境を越えておのづから顯國の事に通ふ。顯明事に對して幽冥事といふ眞意はここにあります。雙方斷絶に非ず。深い緣の糸は永くつづく。そのいはれをたづねれば、遠くさかのぼつて大國主の先代スサノヲのことを見なくてはならない。スサノヲが母神のゐる冥府に來て王となつたことは周知のとほりですが、そのタカマノハラを去るにあたつてなにをしたか。姉なるアマテラスとウケヒして子をうんでゐる。これはあきらかに夫婦の契を交したものにほかならない。血をわけたはらからにして、しかも子までなした夫婦です。タカマノハラ系もヨミ系も、元をただせば切つても切れない仲ですから、ときに喧嘩わかれがあつたとしても、顯幽じつは一につながつて、和戰兩樣の兼合はうたがふ餘地はないでせう。

問。おはなし中失禮ですが、今ごろさういふ神代の物語をうけたまはつても、どうも耳遠くて、なんのことやら、ぴんと來ません。ねらひはどこにあるのか、後世の俗物にもわかるやうに、御說明ねがひます。

答。よくいつてくれました。その問を待つてゐたのです。俗物繁昌の後世なればこそ、これを說く必要がある。神代のことではない。現代のまんなかをねらつて、みなさんの耳目のおよぶところに、物語は進行……いや、進行すべくして、停滯してゐるやうです。これはすべてみなさんの生活の場における事件とこころえて下さい。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

問。いよいよわからない。現代となんの關係があるのですか。
答。大國主は冥府にゐても顯國の事を助けると約束してゐます。その顯國はアマテラス系のしろしめすところとして今もかはりがない。顯世（ウツシヨ）とは現代のことです。大國主の約束は現代にもほろびません。冥府の神のみこころは今でもなほ陰微のうちにこの國の事にはたらきかけてゐるわけです。しかるに、現代のひとびとはこの神をあれどもなきがごとくに、いや、とうに死んだも同然にあつかつて、おん名さへわすれがちのことがすでに久しい。もつてのほかの怠慢です。今までにも、ときに復古の説を唱へるものがゐたことはゐましたが、それさへアマテラス系のみにたよつて、さかのぼるところはタカマノハラどまり、つひにヨミの國までは至らず、スサノヲ大國主系は捨ててかへりみないにひとしい。おろかな思案です。このありさまでは、復古の大業などおもひもよりません。顯幽相通の微妙な道理をさとらなくては、復古の精神が確立したとはいへない。大業が成るか成らないかはそれからさきのことです。
問。復古とはなにをいにしへに復すのですか。
答。いふまでもなく、王政復古です。わたしの説く筋道がしつかり腹にしみこんだなら、この大業こそ現代の急務だといふことにおのづから目をひらいて、ふるひ立たずにゐられますまい。
問。そんな大仕事をいつたいだれがやるのですか。
答。ぼんやりしてはいけない。あなた自身ですぞ。あなたがたすべて、ひとりひとりが他人にい

はれるまでもなく、すすんで立ちあがつて、たがひに手を結んで、こころ猛く事にあたるべきです。

問。こちらは新參の未熟者ですから、まだそこまではとてもとても。

答。未熟でも見どころはある。それだから、わたしが教へるのです。

問。復古の理論をお示し下さるのですか。

答。理論なんぞといふあさはかな後世の作り物をあてにはしない。教をぶつつけに身心にたたきこむ。劍です。劍をもつて直接に教へます。

問。そのための劍術の稽古ですか。

答。稽古は方法の實習です。スサノヲがヤマタヲロチを斬つたとき、その尾から寶劍をえたことを知らないものはゐないでせう。このクサナギの太刀はのちにアマテラスに贈られた。これが顯幽相通のはじまりです。劍の靈氣は二つの境を一につらぬいてゐる。復古をこころざすものは、たましひをはるか神代に飛ばして、かのクサナギの太刀の神靈を身において感得しなくてはならない。いや、げんに劍を取つて、その靈氣をかうむればこそ、復古のこころざしは燃えあがる。このうへになにを說かう。さあ立て。道場に……

問。（しばらく無言。注にいふ。これはことばを絕つて道をさとる工夫である。）

ここの道場に教條を掲げて、「一體眞の道と申す物は實事の上に備はり有るものにて候實事が有れば教はいらず道の實事が無き故に教は起り候なりされば教訓と申す物は實事より甚だ卑きものに御座候」と、平田篤胤の入學問答の一節が書いてあるのを見れば、石城はおそらく平田派の末流のかたわれがいまだに生きのこつて、すなはち今日むきに息を吹きかへして、これがほそぼそどころか、仔細らしく建直しの門戸を張つたもののやうである。顯幽とやらを一つにつないだのが新案のつもりらしいが、そのパンフレットの文句なんぞよりも、石城にとつて「實事」の急所はといへば道場に立つて竹刀を振りまはすことに係つてゐるに相違ない。この狀況において、石城は右翼の「大物」ではないかといふうはさがひろまつたのはむしろ當然だらう。實際に、道場に出入する多くのわかものの中には、ときになんとか會なんとか興業と稱する暴力組織の筋もまじつてゐるやうにうたがはれるのは、まんざら根も葉もないかげぐちとはいへなかつた。

道場は稽古日がきまつてゐて、朝は早くから、午後は暗くならないうちにしめる。講堂をひらくのは月六齋である。そのほかの時間は石城が毎日なにをしてすごしてゐるのか外からうかがふすべがない。今この顯幽館の一室に、宵のくちのあかりがともる刻限といふのに、二人の來客があつた。客はここの建物をはじめ手廣く事業をいとなむ土地會社の社長玉利三郎である。これはもとより石城としたしく、かねて劍術の弟子として道場にはときどきあらはれる。ちかごろ父親が會長にをさまつたあとに、社長の椅子をついだばかりの、まだ若く、年ごろはゴルフ仲間の鶴卷小吉よりもす

こし下に見えた。玉利はその小吉をいつしよにつれて來た。小吉のはうは、すでに石城と識つてはゐたものの、膝ぐみで語りあふといふところにまでは入りこんでゐなかつた。この會合はあらかじめ打合せておいたものにちがひなく、卓上にはとくに出張の中華料理の杯盤がゆたかにならんだ。

玉利がまづ口を切つた。いつも一人稱を「わたし」ではじめても途中で「おれ」にかはるのが癖であつたが、けふはよつぽど氣をゆるしたのか、のつけから「おれ」が出た。

「兩先生のあひだにはさまつて、おれがなにかいふガラぢやないけれど、この會談を世間の目につかないやうに取りはこぶためには、おれもとんだお役に立つたらしいや。森山先生にはこどものときからかはいがつてもらつてるし、鶴卷教授とは肩書ぬきで芝生の上のお附合だし、ゴルフのかへりに寄つたところがうちの會社の施設なら、だれにもあやしまれるはずがない。マスコミの盲點でせう。ただし、おれの出る幕はこの口あけだけ。あとはお燗番にまはつて、オハナシのじやまはしませんよ。どんな深刻な内容でも、お氣づかひは御無用。むつかしいハナシと來たら、おれにはてんでわからねえんだから。こつちの商賣になることだつたら、よろこんでいただきだがね。」

玉利はしやべりながらさかづきを手に、注ぐとも見えないのに銚子はぢきにから、食ふとも見えないのに皿もついからにして、はこばれる一臺の料理をあらかたひとりでこなしかねないほど、流れよくさばいて、箸の音を立てない。もし當人の口にも合ふやうなわかるハナシが碗に盛つてそこに出されたとしたらば、即座に碗ぐるみけろりとかたをつけてしまひさうなけしきであつた。石城

はわらつてうそぶいた。
「おまへさんにたんまり食はせてやるやうなタネが出るかどうか。どちらかといへば、わしも食ふはうにまはりたいな。」
「先生が食ふんなら國レベルの大テイブルだ。こつちも上等なワインのお相伴にあづかりたいや。」
小吉はいいしほに膝をすすめた。
「その國レベルのオハナシを今夜はゆつくりうかがひたいものです。後學にはなによりの御馳走ですな。」
玉利はすかさずに、
「それだ。プロフェッサーもいよいよ國會乗出しだからな。國會も晝間のからつぽな演舌はくだらねえ。夜話といふやつが聞きものだよ。實彈がこもつてる。夜はまだ長いね。思想界の眞打どうしのたのもしいところを見せていただきたいよ。思想がからつぽでないといふことをさ。花もあり團子もあるのが思想だらうぢやないか。おれはだまつて團子のおくばりを待つてるよ。」
小吉はおもはせぶりなことをいつた。
「友情はもちつもたれつだからな。」
この男が「友情」なんぞとあまつたるいことばを使はうとは。こいつ、つねにも似ないことをいふ。玉利はさうおもつたが、うつかり聞きながした。石城は玉利のはうにはかまはずに、

「鶴卷さん。あなたは大學でなにを講義しておいでかな。」

知つてゐるだらうに、なにをいふか。小吉もまともには答へなかつた。

「まあ天地自然の理を人文の場に移して考へてゐるやうなものですよ。人間といふ生物の世の中がともかくできあがつてゐる。それが歴史の場數を踏んで現在ではかうなつて來てゐる。かうなるにはそれだけの筋道があるでせうが、そこに理法をさぐる。日月の運行には宇宙を構成する物理法則がはたらいてゐるわけだから、人間の國には基本として人間の法則がなくてはならない。過去はかう、現在はかうと、ここまでは尋常の講義ですね。しかし、人間の國は現在のままでいいかどうか。これは義理にもいいとは申しあげられない。げんに世の中がのべつにがたぴししてゐる。このがたぴしと法則との關係に問題が出て來る。問題はいろいろな角度から提起されるでせう。なにが出て來てもかまはない。わたしにはわたしの意見がある。これは講義ではしやべらないことです。」

石城は眉もうごかさず、ことばも發しない。小吉はつづけるほかなかつた。

「顯幽道のことは御發行のパンフレットを通してわたしも御高説の一端をうかがつてゐます。門外からの垣のぞきでも、御趣旨は意味深長にきこえて感銘がつよい。書生流に申せば、あらはれた表とかくれた裏とを見ぬいてこそ歴史を讀んだといへるでせう。顯幽つらぬいて一の世界を、わが上古のはじめに置く。そこに立ちかへるのを復古とおつしやる。ところで、わたしとしては、その精神を體して、このみごとな世界をやがて近づく未來に置く。これを未來に待つためには、今すぐに、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com